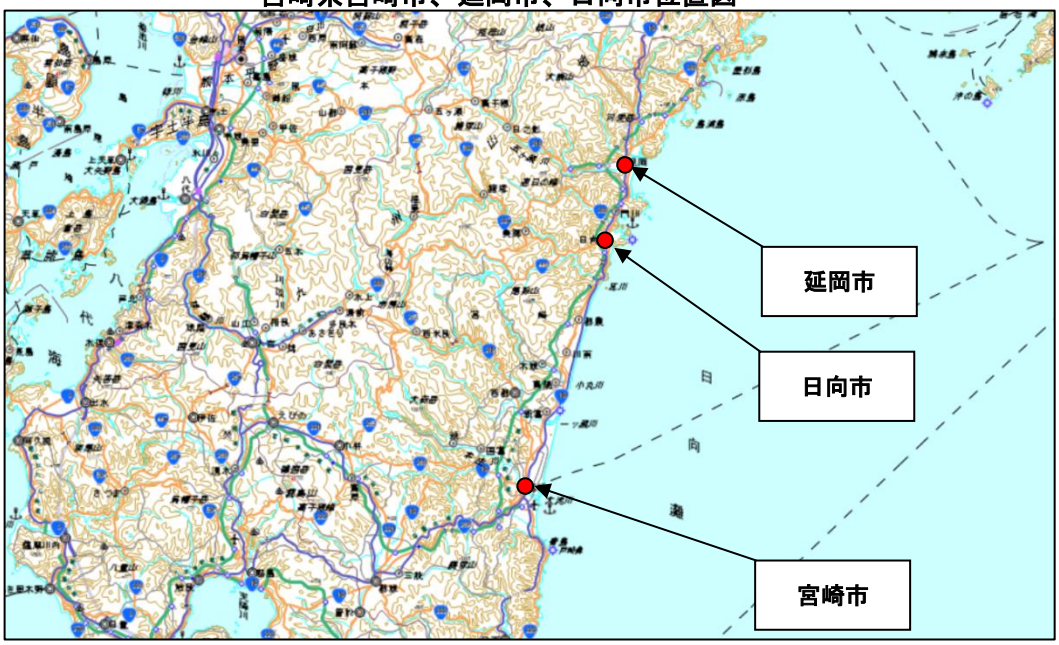
年号：1662 年

月日：10 月 31 日

災害名：日向・大隅地震（M7.5～7.8）〔外所地震〕の概要

宮崎県宮崎市、延岡市、日向市位置図



出典：国土地理院

【外所（とんどころ）地震の概要】

・宮崎県宮崎市は、江戸時代まで大名が直接統治せず、城下町が形成されなかった。このため、古い文献が少なく、災害の履歴を遡ることが困難な状況にある。

・宮崎市内で確かな記録として残されている大規模な地震と津波に、寛文 2 年（1662 年）10 月 31 日に発生した「外所（とんどころ）地震」がある。

・外所地震は、有史以来最大級の日向灘地震である。震源は日向灘沖の北緯 31.6 度、東経 132 度、マグニチュードは 7.6。（7.5～7.8 とも言われている）。

・宮崎県内の大部分で震度 5 以上の揺れがあり、高さ 4～5mほどの津波が宮崎県から鹿児島県大隅半島一帯に来襲したと推定される。

・特に飫肥藩（現在の宮崎市大字熊野周辺）を中心に被害が大きく、延岡、高鍋、佐土原、飫肥の諸城で石垣が崩れ落ち、3,800 の家屋が倒壊。200 人が死亡したと飫肥藩の記録にある。
・平部嶠南（飫肥藩家老：1815-1890）は、自身の著書『日向地誌』の中で、「寛文二年九月十九日の夜子の刻、日向国地大いに震し、且つ津波俄かに来りて那珂郡の内下加江田本郷所々の地陥って海となること周囲 7 里 35 町、田畑 8500 石余、米栗 2350 石余流失あり。潰家 1213 戸の内、陥って海に入るもの 246 戸、其人員 2398 口の内、溺死 15 人、牛馬 5 頭に及べり。飫肥の城にも石垣 9 ヶ所 192 間破壊し、城隍 2 ヶ所埋り、外緒士屋敷土蔵石垣等の破損勝て数ふるに遑あらず。誠に未曾有の大災なり（原文片仮名）」と記している（木花郷土誌編集委員会）
・倒壊した家屋 1,213 戸（うち海没した家屋 246 戸）、水死者 15 人、那珂郡 7 村の周囲 7 里 35 町（約 32ｋｍ）の水田が浸水、8,000 余石の米が水浸しになったとされる。
・また、『日向纂記』の記述に「那珂郡ノ内下加江田本郷所々ノ地［故老ノ話ニ青島並東ニ出シ村七ツ殿所ナト云ヘル所アリシカトモ寛文ノ地震ニ陥テ海ト成レリト（中略）所謂七ツ殿所村ハ下加江田及ヒ本郷ノ内ニアル小区ノ名ナルヘシ］陥テ海トナルコト周囲七里三十五町」とある。
・これらの記述に基づくと、大淀川河口の下別府村、福島村および加江田川河口の外所（殿所）村で１ｍほど地盤が陥没。そこへ地震に伴う津波により海水が流れ込み、青島と並んで南にあったという外所村は海に沈んだ。外所という地震の名称は海没した村の名前に因むものである。
・外所地震発生後、入り江は洪水のたびに土砂で埋まり、次第に泥沼となっていった。
・地域の人々は、享保年間（1716～1735）に、島として残っていた島山を基点にして、長さ 8 町（約 872m）の正連寺内堤を築いた。
・文政年間（1818～1829）には、長さ 15 町（約 1636m）の正連寺外堤を築き、内海を埋め立てた。この堤によって、地震で失われた田が取り戻された。（木花郷土誌編集委員会）

▲正連寺外堤から埋立地を望む

▲池が多く残る（奥に見えるのは木の花ドーム）

【外所（とんどころ）地震被害者の供養碑を 50 年おきに建設：宮崎市熊野字島山】

・宮崎市熊野字島山に現存する 7 基の供養碑は、外所地震・津波の被害を後世に語り伝え、防災上の戒めとするため、庄屋が 50 年ごと（1 世代）に 1 基ずつ建築してきた。

・左端の石碑が最も新しく平成 19 年（2007 年）に建てられた 350 年忌の碑である。

・右に向かって年代を遡り、宝暦 11 年（1761 年）・文化 7 年（1810 年）の年代が刻まれた石碑もあるが、摩耗して碑文は読み取れない。

▲外所地震の供養碑位置（宮崎市熊野字島山）

・昭和 32 年(1957 年)の 300 年忌には宮崎市が建立し、平成 19 年の 350 年忌では地元の木花地区住民の出資により建てられている。

・島山地区の自治会長　岩切氏の談話では、この供養碑を防災活動の教訓にしているという。これらの供養碑はまさに“災害文化の伝承”に相当すると言える。

▲供養碑（右から 50 年忌～350 年忌）

▲最新の供養碑（H19 年の 350 年忌に建設）

▲供養碑（左から昭和 32 年建設の 300 年忌～50 年忌）

▲供養碑は国道 220 号と 338 号の交差道路に面して建つ（一番手前が島山地区の自治会長　岩切氏）

■供養碑の概要解説　（島山地区の自治会長　岩切氏より入手）

外所大地震歴代供養碑

地震発生　年月日・時間

※　震文二年（一六六二）旧九月十九日子の刻　震源地　青島の北東の位置

（壬　寅年）　「※地震二ヲ外所人海ヨナル故　ゆ口ノ郷ニ後世」　西教寺系図

第一基　五十回忌　石片に「辛巳」の刻字。元禄十四年（辛巳）一七〇一に該当。この年は地震発生から三九年目に当たり、五十回忌法要は不自然。依って第一基は不明。

第二基　百回忌　年号不明　消除三垢冥・廣済衆厄難〈等の刻字有り　九九年目

辛巳の年は宝暦十一年（辛巳）一七六一にも該当する。　大経・重誓偈）

依って、地震発生百回忌に第一基の供養碑を建立したのでは、とも思われる。

第三基　百五十回忌　文化七年六月二四日（庚午年一八一〇）　一四八年目

十方恒沙仏　廣開浄土門　善導著　観経・観経玄義分（帰三宝偈）

第四基　二〇〇回忌　安政六巳未年　（一八五九）　一九七年目

天下和順　日月清明　風雨以時　災厲不起　国富民安　兵戈無用　（大経）

「天明五」　安政六己未九月二六再建之（一八五九）　正右卫門

第五基　二五〇回忌　明治四十一年　（一九〇八）　二四六年目

若人持戒　多諸天増　足威光　修羅減少　悪龍無力　善龍有力　風雨順時

四気和暢　甘雨降　稔穀豊　人民安楽　兵戈戦息　疾病不行也

第六基　三〇〇回忌　昭和三十二年九月一九日（丁酉年）一九五七　二九五年目

宮崎市長　有馬美利の名とメッセージ

第七基　三五〇回忌　平成十九年九月一五日（丁亥年）二〇〇七　三四五年目

木花振興会と西教寺「我々自然界に存在するものは、決して大自然と共に生きることを忘れることなく、それに対して大なる畏敬の念を持ち防災の大切さを後世に伝えることにある。」

前面墓石・・西教寺初代住職　釈　道源法師之墓　正保六月二十四日　七十六歳寂

※外所大地震（M七、六）旧暦寛文二年九月十九日（新暦一六六二年十月三十日）子の刻

日向灘沖で地震・津波が発生。

震源地　北緯三二、七度　東経一三二度

青島より北東の位置

※宝永地震（M八、四）一七〇七年十月二十八日（旧暦宝永四年十月四日）死者二万人・倒壊六万戸。土佐を中心に我が国最大級の地震そして大津波が発生。当然日向灘も襲う。

島山自主防災主催の供養及び防災講座

・藤本　廣　宮大名誉教授の講演

平成十七年九月十三日実施

文久二年四月八日（壬戌年）一八六二

大正十四年二月（乙丑年）一九二五　二六三年目　　日表謨阿弥陀跡波除塔

【外所（とんどころ）地震の伝承：宮崎市新別府町前浜　一葉稲荷神社】

・宮崎市新別府町の一葉稲荷神社の本殿に、外所地震の伝承「木彫りの白兎」がある。

・神社の由緒書きによれば「寛文二年（1662 年）西海大地震の時、この地に大津波が押し寄せました。その時、突如白ウサギが現れ波を跳ねのけて、この地を災害よりまもったという伝説があります。御本殿の裏側には貴重な彫物としてその白ウサギが今も残されております。」とある。

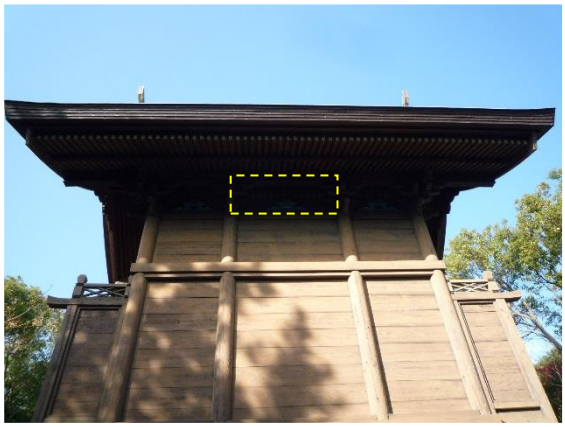
・古来より白い動物は、災害が起こる前触れのシンボリックなものとして扱われてきた。因幡の白ウサギ伝説は災害伝承という説もある。

・一葉稲荷神社の「木彫りの白兎」は現代に外所地震の被害を伝える貴重な史料である。

▲一葉稲荷神社位置（宮崎市新別府町前浜）

▲一葉稲荷神社の本殿

▲開運の白兎の由来



▲一葉稲荷神社の本殿裏に木彫りがある（点線部）

▲外所地震の伝承「木彫りの白兎」

【宮崎市内での地震津波対策：宮崎市】

・宮崎県宮崎市の防災対策は、これまで台風・豪雨災害に重きが置かれていたが、東日本大震災以降、日向灘に面しているという地理的条件から、危機感を持って地震津波対策に取り組んでいる。

・地震・津波の発生時に周辺住民も避難できるよう、平成 24 年度に沿岸部の小学校 5 校と中学校２校の屋上に通じる避難階段を整備した。

・また標高の低い地域には、避難に役立つよう標高表示板を整備している。

▲宮崎市立赤江小学校の避難階段

▲宮崎市内の標高表示板

▲宮崎市内の標高表示板

▲宮崎市内の標高表示板

・東日本大震災時には、国道 220 号青島バイパスのパーキングに、多数の住民が避難した。
・この事態を受け、国道 220 号や宮崎県道路公社管理の道路のうち、盛土構造部などの津波避難に有効な箇所において、道路管理者が避難階段の整備を進めている。

▲直轄国道 220 号（青島地区）の避難階段位置
出典：国土交通省宮崎河川国道事務所 HP

▲直轄国道 220 号（青島地区）の避難階段①

▲避難階段は高齢者対策で段差が低い

▲直轄国道 220 号（青島地区）の避難階段②

▲直轄国道 220 号（青島地区）の避難階段③

▲避難階段の誘導板（青島海岸）